括的体系的な，信用を重視した国際通貨(決済)制度論である。そして歴史的分析をとり扱いながら，全体としてはその理論的重要性の方にはるかに大きい意義をおいた体系的著書である。しかも中世および低地諸国の為替と信用をとり上げることによって，これまでのイギリスを中心とした定説的な信用制度に関する見解にもとづきながら，さらにイギリスに先立つ中世以降の信用制度について新しい理解を深めていることは，何よりも本書の他と比較できないすぐれた特色である。

しかし，(1)目的論的な思考が余りにも強く，本来はより具体的な「国際通貨制度」を，理論の厳密化という観点から限定化しすぎる。(2)歴史的分析が構造に中心を置きすぎており，部分的であり，跳び跳びで断続的となっている。(3)為替銀行とマーチャント・バンカーとの相違，また中央銀行との結びつきが必ずしも明確であるとはいいがたい。(4)信用を強調する余り，国際通貨制度の「貨幣論的分析視角」といわれる問題意識，したがって「金」の役割を安易に受けとめている，等の疑問が生じることを否定することができない。また引用文献，資本論引用箇所についての解釈に関しても，いくつかの納得できない取扱いがみられる。　〔玉野井昌夫〕

津　田　内　匠

『チュルゴの蔵書目録』(I, II, III)

——フランス国立図書館所蔵の手稿による——

(資料調査シリーズ: No. 1—3)

一橋大学経済研究所資料調査室 1974 xii,39,979 ページ

思想家の思想形成の過程を解明する上で，彼が何を読んだかをつきとめることは，きわめて有益な手続きである。もちろん，思索を触発しかつ培うものがいつでも書物だとは限らず，個人的体験であったり，現実が提起する問題であるかも知れない。その意味で，この探求が徒労に終わることもあるだろう。しかし数々の研究が実証するように，思想家の知的世界の復元や，彼が受けた影響の確認に大いに資するものであることは疑いない。

とはいえ，実際問題として，彼の読んだ書物の全タイトルを見つけ出すことは難しい。中には，読んだ書物の表題と感想を逐一書き記す几帳面な思想家がいて研究者の労を省いてくれることもあるが，これなどはまれで，しかもそのノートを発見したとしての話。そこで利用されるのがより間接的な資料，すなわち，思想家が読んだかまたは読んだと称する書物のではなく，彼が所持していた書物のリスト，蔵書目録である。このたび一橋大学経済研究所の津田内匠教授が『チェルゴの蔵書目録』を刊行したことは，この意味でチェルゴ研究における画期的な業績と呼ぶべきだろう。

蔵書目録を口にすると，必ず次のような反論が出される。所持していたことはそのまま読んだことを意味しない。読む意志を持たずに稀本・珍本を蒐集するだけの愛書家もいるし，読むつもりで買っても開かず終まいといった経験は誰にでもある。また逆に，友人や図書館から借りて読むことも多い。ましてや本の発行部数が少なくしかも高価であった時代には，個人間の本の貸借は今日と比較にならないほど頻繁だったはずだ。その上，社会的威信を傷つけないために，下女の持っていたエロチックな恋愛小説を借りてこっそり読んでいた18世紀フランスの貴族の奥方の例も知られる，と。これは尤な意見であり，また文献至上主義の学者が蔵書目録に然るべき重要性を与えたがらない理由の一つでもあろう。しかし資料としての以上の欠点を認めてこれを慎重に取り扱うなら，思想家の思索の謎を解く一つの貴重な鍵となるだろうし，同時に，彼の知的生活の隠された側面に光を投じるに違いない。「取得行為は心理的モチベーションの最も確実な基準の1つである」とは，『18世紀フランスの書物と社会』(François Furet etc., *Livre et société dans la France du XVIIIe siècle*, Paris, 1965)のあとがきでのアルフォンス・デュプロン Alphonse Dupront の言葉である。

チュルゴの蔵書の目録としては，彼の死後に作成された蔵書売立て目録が古くから知られている。蔵書の売立て目録は普通，遺族が故人の蔵書を売却する目的で本屋に作らせるカタログであるからして，そこには遺族に不必要な，そして商品価値のある書物のみが記載される。従って所有者の生前の蔵書の姿を忠実に反映している資料とは言いがたい。かつて文学史家ダニエル・モルネが18世紀パリの司法官たちの蔵書売立て目録を分析し，法律書の少ないことを明らかにした(Daniel Mornet, "L'enseignement des bibliothèques privées 1750—1780" *Revue d'histoire littéraire de France*, 1910)が，この怪(?)は，当時官職が少なからず世襲されていたという事実によって説明がつく。チュルゴの蔵書売立て目録も例外ではなく，欠落が多く，資料としてはなはだしく不完全なものである。一方，津田教授が刊行した目録はフランス国立図書館所蔵の手稿で，教授は，チュルゴが生前自らの立会いの下に秘書に書かせたものと推定し

ている。その状況についての推理は，厳密な考証に裏打ちされていて実に説得的である。手稿に書名・出版地・出版年・巻数がもれなく記載されていること，当時慣行であった宗教・法律・科学と技芸・歴史・文芸の5大カテゴリーによる分類が施されていることも合わせて考えれば，これは蔵書目録として最も理想的なものと言ってよい。ちなみに，上記の2種の資料の他に研究者が利用する資料として財産目録がある(例えばケネーの財産目録)が，そこには通常，出版年・出版地・巻数はおろか書名の完全な記載すらない。

また，津田教授が巻末に付した解説も，それだけで1編の論文として高い価値を持っている。財政総監の職を辞した晩年のチュルゴが蔵書の置き場所やその運搬に腐心する姿，集書にかける彼の情熱，蔵書売立て目録の批判，蔵書目録(手稿)の作成の経緯およびその紹介と分析など，未発表書簡を駆使した綿密な研究の成果がそこに集約されている。その中で最も興味深いのは，チュルゴの蔵書形成は彼の著作の構想に導かれたもので，それは言語学研究から発想された普遍史の構想と政治経済学の構想にほかならない，という指摘であろう。チュルゴの著作および書簡に精通しているチュルゴ研究家ならではの卓見と言わねばならない。

それに劣らず興味をそそられるのは，チュルゴの蔵書構成を宗教・法律・科学と技芸・歴史・文芸の5大カテゴリーのパーセンテージで表わし，ボッシュエ，モンテスキュー，ヴォルテール，ドルバック，ケネー，スミスのそれと比較して，全体としてはヴォルテールの蔵書構成に最も近い，としている点である。ボッシュエは厳密に言ってチュルゴの同時代人ではないので，この比較に問題がないとは言えないが，チュルゴの知的関心の広さがこうして統計によって実証されたわけである。これらの7つの目録に共通の分類基準が適用されていず，中にはケネーの財産目録のように書物が分類されていない目録のあることを思えば，この比較に至るまでの準備作業がいかに多くの時間と労力を要するものであったかは容易に想像できる。だが欲を言えば，著名な思想家たちの蔵書との比較で満足せず，より広く様々な社会階層の人びとの蔵書とも比較したら，チュルゴの蔵書の特色とオリジナリティーが一層明確になったであろうと思われる。ことに，階層的にはチュルゴとあまり異ならないが政治的には対蹠的な立場にあった，高等法院の司法官の蔵書との比較は無意味ではないだろう。フランソワ・ブリュッシュの『18世紀パリ高等法院の司法官たち』(François Bluche, *Les magistrats du parlement de Paris au XVIIIe siècle*, Paris, 1960)，イヴ・デュランの『18世紀の総括徴税請負人』(Yves Durand, *Les fermiers généraux au XVIIIe siècle*, Paris, 1971)，ジャン・メイエールの『18世紀のブルターニュ貴族』(Jean Meyer, *La noblesse bretonne au XVIIIe siècle*, Paris, 1966)はそれぞれ蔵書の紹介と分析に1章を当てているし，地方の司教や司法官の蔵書のモノグラフィーもすでにいくつかある。

欲の出たついでにもう1つ。チュルゴの蔵書に関しては，その5大カテゴリーの構成比のかたわらに各カテゴリーの内部の構成比を明らかにする必要があるだろう。「宗教」——聖書・教父・宗教会議・神学・護教論，「法律」——教会法・市民法・法令，「歴史」——教会史・世俗史(古代史・近代史・補助学科)・地理と旅行記，「科学・技芸」——哲学・自然科学・医学・政治経済学・農学，「文芸」——辞書・言語学・詩・演劇・小説・書簡集・雄弁術・暦のパーセンテージを求めることは，目録ですでに分類が行なわれているので容易なはずである。さらにこれを細分化して，例えば地理・旅行記については国別に，哲学・政治経済については著者別に，辞書・言語学については言語別にタイトル数を出すことも格別，難しいとも思えない。この一覧表によって，チュルゴの知的世界の構造と多様性が一目瞭然になったであろうし，また著作およびその構想と集書の関連性の論証も説得力を増したであろうだけに惜しまれる。

以上，『チュルゴの蔵書目録』を一読して気のついた点を述べたが，この目録の刊行が『解説』とともにチュルゴ研究における貴重な貢献であることは疑いない。しかもこの刊行の意義はチュルゴ研究においてばかりか，『18世紀』(*Revue Dix-huitième siècle*, 1976)の評者の言うように，広く書物の文化社会史研究においても大きいことを付言したい。リュシアン・フェーヴルとH・J・マルタンの共著『書物の出現』(Lucien Febvre, H. J. Martin, *L'apparition du livre*, Paris, 1958)以来，アナール学派の歴史家たちが中心となって書物を文化社会史の角度から研究し，数々の優れた業績を産んでいる。書物と権力，検閲のメカニズム，出版・印刷業の社会学，地下出版と禁書の販売ルートなど，書物の生産・流通レベルでの様々な問題，さらには受容・消費のレベルでの問題が徐々に解明されつつある。このような最近の研究動向の中で，私蔵書が一層注目されるようになってきた。それは，ダニエル・モルネが行なったように“啓蒙”の伝播を跡づけるという，狭い意味の思想史の試みの資料となるばかりか，ペンを執って自己を表現しなかった人びとを含めた様々な人びとの知的生活や教養水準の解明

という，深層の思想史つまり心性史(Histoire des mentalités)の試みにも役立つからである。『チュルゴの蔵書目録』の刊行の大きな意義の1つはまさにここにあると言わねばならない。　〔長谷川輝夫〕

S. A. マーグリン

『労働過剰経済における価値と価格』

Stephen A. Marglin, *Value and Price in the Labour-Surplus Economy*, Clarendon Press, Oxford, 1976.

1

低開発経済にとって計画理論は，マクロ的な経済計画の意味でも，ミクロの投資フィージビリティー評価の意味でも，経済発展理論の重要な研究課題である。従来，経済発展理論の分野では，計画と投資効果の測定理論は新古典派的な諸仮定の応用問題として使われて来て，誰もそれに疑問をさしはさむ者はなかった。おそらく，これは発展問題の研究者が文化人類学者ほどには低開発経済の現場を見ることがないままに理論を作って来た為である。しかし，最近十数年の間――ベトナム戦争に刺激されてこの分野の研究資金が一時的に潤沢になった時期――経済発展理論家達が現実の低開発経済を見る事が多くなるにつれて，そこが新古典派的理論が画いていたものと随分かけ離れた世界であるという認識が深まりつつある。そして低開発経済の諸現象を生んでいる真のメカニズムを摘出し理論化しようとする動きが高まっている。本書もまたそうした動きの一環として見ることが出来る。

著者 Stephen A. Marglin はハーバード大学を中心に活躍し，経済計画理論や投資評価理論の分野で優れた業績を残して来た人であるが，世銀のプロジェクト評価の実務経験を通して低開発諸国の現実を見ている間に，従来の新古典派理論の応用問題としての計画理論に疑問を持つに至った一人である。

本書では，この著者にしては控え目ではあるが，極めて重要な2つの問題提起を行なっている。第1に，従来の計画理論は，純粋理論の場面でも，また世銀エコノミストを中心とする現実的応用の場面でも，新古典派理論のフィクションに頼り切っていて，アダム・スミス以来の価値と名目価格の識別の問題を理論的に処理済みのものとして来た為に，計画理論として致命的な欠陥を持っているという本質的な問題提起である。第2に，従来の計画理論は，世銀エコノミストの応用場面においてすら，低開発経済の特質である surplus labour が引き起す distortion を無視して来たが，それでは低開発諸国の発展計画理論としては誤りであるという指摘である。

著者は，この様な問題提起を要約して「私は如何なる optimization についても懐疑的にならざるを得ない。」と述べている。また，明らかに低開発経済の現実の姿からかけ離れている新古典派の諸仮定を採用し続けて来た開発テクノラートを批判して「自然の制約以外に政治経済的制約を想定することが出来ない人々の optimization は technocratic bias を生むだけである。」と厳しく批判している。

著者自身が繰り返し述べている様に，ここに展開されたものはあまりに単純すぎて現実の発展計画に応用するには程遠い。しかし，経済発展理論の研究者と実務家が改めて自らに問う事をせまられている問題――低開発経済の発展とは何か，その特質を理論モデルや計画の中にどう表現するか――を明確に描き出していて，この分野の研究に実に大きな一石を投じた著作であるということが出来る。

2

経済発展理論は，ルウィス(1952)，ラニス・フェイ(1961)の時点で，改めて，新古典派とケインジアンの世界からアダム・スミスの農工間経済発展のとらえ方に回帰した。それは，経済発展の本質は農工間の経済重心の移動にあることを再確認したという意味で重要な意味を持ち，その後今日に至る経済発展理論の展開を促した。しかし，形式はスミスの農工2部門観をとり，農業部門については古典派(マルサス)的な均衡原理を仮定しながら，工業部門の賃金・価格決定は新古典派の説明原理が採用され続けて来たのが実態である。しかし surplus labour が存在する無制限労働供給の低開発経済では工業部門の雇用吸収が順調に進むという Lewis 的解釈は現実には必らずしも実現せず。むしろ，工業化が進めば進む程雇用吸収は鈍化するという事実がみられた。

この現象については色々な解釈がある。例えば Gerschenkron はエリジブル・レイバーの不足をあげ，Witte は近代工業の代用弾性値が極く小さい事をあげている。又，Todaro や私は都市貧困部門が意外に大きいことを指摘した。

一方同じ現象を計画モデルの中にどう組み込むかという視点から Frish, Chenery, Kahn, Tinbergen 等の試みがあるが，Marglin は，本書において，surplus labour の存在する経済では，実行資本価格(accounting rental rate)は資本の限界生産力より高くなる事を示して，そ